

はじめに

今日、膨大な量の情報を誰もが簡単に獲得できてしまう時代となっている。それは、大変便利で幸せなこともかもしれない。

また、学校では、スピーチやプレゼンテーションがあらゆる場面で取り入れられ、子どもたちは自ら発信する機会に恵まれている。しかし、発信することそのものの価値を追求するあまり、「言葉」の本質を理解しないまま、目にした情報を安易に使ったり、他人の言葉で表現してしまったりしてはいないだろうか。自分の中に「言葉」を落とし込まないまま、思考したり判断したりしたつもりにならなっていなだろうか。

一見流暢に発表をする子どもたちを見ながら、しばしばそのような不安に襲われる。まずは、私自身（大人）が、言葉で批判することや批評することについては、もつと敏感にならなければいけないのではないだろうか。そのような思いを漠然と抱いていた時に、本校国語科共同研究者である田中先生から、『批評』の言葉をためる」の授業を考えてみないかというお話をいただいた。

『批評』の言葉をためる」は何年も前から興味深い教材文であると感じていた。「学校のリーダー」「受験生」などと形容される中学三年生。例えばがむしやらに自己表現していた二年生のときから少しだけ成長し、自分を客観的に見るができるようになってくる子どもたちも多い。心が少し落ち着き始めたころ、自分の「言葉」についても、少しずつ客観的な側面を磨いてほしい、そのような思いでこれまで私はこの教材を読んできたと思う。ただし、これを意見文や弁論文を書くときの導入にするといった取り組みにとどまっていた。

そこで、今回、『批評』の言葉をためる」の単元を考えるにあたり、大村はまが「批評」や「批判」についてどのように考えていたのか、授業の記録の一部を確認してみた。

終戦から間もない昭和二十二年。大村はまは、国定教科書ができたことを大変喜び、さらに、その教科書の中に「やさしいことばで」という教材を見つけて、「胸をおどらせた」という。「大村はま国語教室」（第一巻）において、その感動は次のように綴られている。

「やさしいことばでこそ、人の心のなかにはいつていけるのだ、むずかしい理論、高い思想、深い感動を、みんなにわかるやさしい、平らな、なめらかなことばで伝えていかなければ、文化はみんなのものにならないのだ、文化がみんなのものにならないければ、文化国家として民主国家として日本は生き返っていけないのだ。」

ある日、大村は少年少女向けの雑誌の裏表紙に載っていた四種の鉛筆の広告を見つけ、「やさしいことばで」の教材として適切であると確信する。大村の手応えのとおり、子どもたちはこの広告を材料に、活発な意見交換ができたようである。「やさしいことばで」の学習記録には、「町の掲示版や広告の文を集める。一般の人に向かったの文として批評する。よくないのは直してみる。」とあり、この時間の「批評する」ための教材の一つとして、鉛筆四種の広告の比較が取り入れられたのだ。

また、大村は、昭和四十年代には「本を読んで、批判する力、その基礎力を養う」という目標で授業を組み立てている。当時の「文部省学習指導要領三年」には「読むこと」の目標の中に、「批判的に読むこと」が取り上げられていた。そのことについて大村は、「批判することは」実際には、無理を感じさせるほどむずかしい」「中学生は、軽い批判、根拠の不確かなまま気分におされて口走る、また書き流す批判的なことばが多すぎるので、ほんものの批判に導くことがむずかしいのである」（『大村はま国語教室』第八巻）と述べている。さらに、「ほんとの批判ができるには、まだ幼いことを考え『批判的』というところに止めたいと思った。それも、『批判的に読むこと』そのこともまだ無理な状態なので、『批判的に読むこと』の基礎になる態度、力の一つを目あてにしている」と述べている。

そこで大村は、この授業において、福沢諭吉著『福翁自伝』と八つの資料を配布し、子どもたちに比較させた。

『福翁自伝』と同じ内容が、他の資料ではどのように書かれているかについて、子どもたちに話合わせたのである。さらに翌年、同じ目標で、違う資料『シートン』をここでも三種類使用して比較するという学習を重ねている。

今日、様々な教科において、当たり前のように「クリティカルシンキング」「批判的思考」という言葉を耳にする。ただ、大村はまでさえ、中学生が「批判的」な考え方をすることについて「導くのがむずかしい」と、かなり慎重に授業を組み立てていたことが分かった。また、「比較する」という学習活動を繰り返し採用していることが確認できた。

「批評するとはどんなことか。」「批判と批評はどう違うか。」それを『批評』の言葉をためる」の文章から、まるでテストの答案用紙に記すように書き抜くことができれば、「批評」が分かったことになるのか。そんなはずはない。

子どもたちが、「批評とは何か」を知り、「批評」の文章を書くための基礎となるような授業には、どのようなことを大切にしていくべきだろうか。どのような学習活動が考えられるだろうか。時間的に制限がある中ではあるが、この単元のあり方を探ってみた。

また、今回は「指導案」という形をとらず、「大村はま国語教室 第八巻」「D批判的に読む（昭和四十三年と四十六年の石川台中学校）」の授業記録にならない、単元の計画を次のように記した。もちろん、大村の頭の中には子どもたち一人ひとりもっている力について膨大な量の情報と、緻密な指導案があったはずである。今回は、（ ）で教師の支援を示した。

一、 目標

○批評とは何かを知り、批評文を書く力、その基礎力を養う。

二、 資料等

○資料1 「海のいのち」立松和平 伊勢英子（『東京書籍 新しい国語六』）

○資料2 「海の命」立松和平 伊勢英子（『光村図書 国語六 創造』）

（○資料3 「海のいのち」立松和平 伊勢英子（ポプラ社））

資料1、資料2は小学校の教科書であり、子どもたちがかつて学習した教材である。子どもたちにとって身近なもので「比較」できるもの、さらに、安易に「批判」に走ってしまわないようなものが好ましいと考え、今回はこの「海のいのち」を採用した。なお、資料3については、使用するかしないか、選択制にする。まず二つを比較することで精いっぱいの子もいれば、もう少したくさんものを比べてみたいという子もいると考えたからである。

○類義語辞典や辞書

感覚的な言葉や、単なる印象を「批評」する言葉に高めるために、「もっと豊かな表現にならないだろうか」と子どもたちが言葉を分析していくときに、使用したければ、使用する。

【2】(第二時)教科書の『批評』の言葉をためる」を読み、批評とは何かを理解する。

一 『批評』の言葉をためる」を対話しながら読む。

○二段落 ・このような会話を聞いたこと、したことはあるか？

・例えば、○○に、具体的にあてはめたい歌手はいますか？

○四段落 ・批判と批評はどう違うのだろう。批判だけではなぜだめなのだろう。

・この会話のどこが批評だろう。

○八段落 ・言葉をためる」とはどういうこと？(近くの席の人と話してみましよう。)

・相手に届く良い言葉」とはどのような言葉だろう。

・ためないと、どうなるだろう。ためないと、何か不都合があるだろうか。(知覚の人と話してみましよう。話したら、どんな話をしたかおしえてください。)

○九段落 ・「自己ルール」とは何だろうか。あなたには自己ルールがあるか。

・「自己ルール」を言葉によって交換し合うとはどういうことだろうか。

○最後の「感受性」について たくさんの優れた文章に触れていこう。

◎もう一度三段落

・会話文のところを

「大好き。なぜなら、格好いいから。」

「(映画)私、全然だめ。だって、退屈だから。」

「私も嫌い。なぜなら、いまいちだから。」

このように、なぜなら等の理由を表す言葉を付け加えて言い換えてみました。

・こうすれば、いいのか？と考え、話型の問題ではないということに気付く。

(◎左の問いをうけて、四段落、の具体例のどこが良いのかに改めて気づく子がいれば、その子の言葉で説明させる)。

二 交流し、相互に文章を分析する。

○今、ある言葉で「相手に届く良い言葉」に高められそうなところを探す。

○線を引く。

三 返ってきた原稿用紙(自分の文章)を見て、確認する。

【3】(第三時) 前時の学習をいかし、一時間目に書いた自分の文章を、「批評文」にまで高めて書く。

一 批評とは何か。これまでの学習材を確認する。

○最初の文章を項目だてて整理した図↓すべての項目で書く必要はない。

○交流した原稿用紙(自分の書いた文章)↓すべてを書き換える必要はない。

○線が引かれている言葉を見て、どの言葉なら、「批評」に高められそうか。と考えて、絞って書いてよい。もちろん、線のひかれていないところでも、自分の書きたいところを書いてよい。

二 〈てびき〉を見ながら「批評文」を書いていく。

○書くときに言葉を分析する。

「この言葉を使うことで、読む人がどう思うか」「何か新しい言葉が使えないか」と考えてみる。「この言葉を手がかりに、考えられること何か」と考えてみるのが大事であると知る。

○自分の批評文であることを確認する。

自分がどう感じたか、周りに伝わればよい。自分がどう見たか、周りに伝わればよい。構成(序論本論など)は気にしなくてよい。ということを確認する。

三 書き終わったら、他の人と交換して、ノートに感想を書き合う。

〈てびき〉こんなふうには、「批評文」に高める。〈ヒント〉

書き出しのときのヒント

○一枚の絵に焦点を絞って始める。

例・最初に出てくる、船に乗る「父」の後ろ姿の絵は、同じなのに、多くの違いがある。

○問いかけから始める。

例・物語において、絵は、多いほうが良いのだろうか。そうとは限らないのだろうか。

○ある場面に注目して始める。

例・太一が「青い宝石の目を見た」ときの挿絵を比べてみると……

○絵の選択の仕方から始める。

例・東書だけにある最後の花の絵について考えてみた。

○全体的な印象から始め、焦点を絞っていく。

例・一見全体的に青い絵が多いなど感じるが、実はそれぞれが違う青色だった。まず……

○自分が比べたものを明らかにしてから始める。

例・クエの存在感がとにかく強いという印象なのだが、他の挿絵でのクエの描かれ方を比べてみた。

○登場人物を具体的に出しながら始める。

例・太一が描かれている挿絵を比べてみると……

○東書と光村のどちらかに話題の中心をもってきて始める。

例・東書の挿絵の配置の特徴に注目してみた。

○物語の内容に触れながら始める。

例・太一は、父の死を受け入れている。父が描かれている挿絵は……

○挿絵を編集した人の思いを想像して始める。

例・与吉じいさと太一が船に乗っている絵をこの場面に用いた意図について考えた。

○左以外の書き出し

四、授業の実際

九年四組【一時間目】

*終始、自然なつぶやきが多かった。

*小学校の時に使った教科書であるということ、かなり興味を持っていた。

*一名、文章を書くのが好きな女子生徒がいるのだが、原稿用紙の文章を最後まで書きたい、という欲求から、図にうつることなく時間を終えた。ただ、その子の次の日の生活ノートには「五教科全部ある日はいつも疲れるのだが、今日の国語は楽しかった。」とあった。

○最初の問い「どちらが好きか？」

東書十四

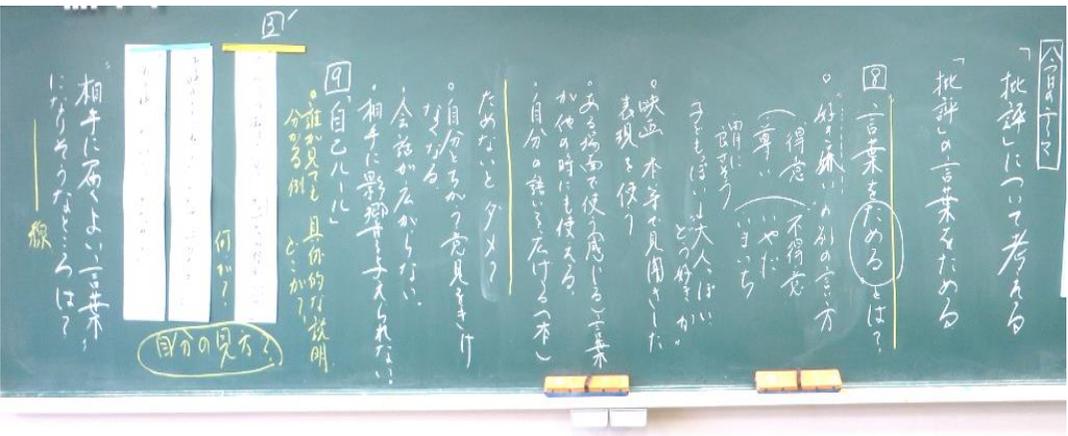
光村十三

○出てきた項目

- ・文字
- ・段落
- ・内容(文の有無)
- ・読点の量
- ・字の太さ
- ・題名
- ・絵の大きさ
- ・絵の色
- ・人物の大きさ
- ・絵の淵の感じ
- ・絵の濃さ
- ・絵と文字の隙間
- ・絵の数
- ・絵の位置
- ・終わり方(絵と文字)
- ・色味
- ・ズームアップの仕方

九年四組【二時間目】

○実際に出てきた声



八段落の「言葉をとめる」とは？

○好き嫌いの別の言い方を表現できるようになること。好き嫌いだけだと、子どもっぽいけれど、どう好きか、を説明できると大人っぽい言い方になると思う。

○映画や、本、漫画などで見聞きした表現を使うこと。

○ある場面で使う(感じる)言葉が、他の場面でも使えること。

○自分の語彙を広げること。本などで。

言葉を、ためないとダメなのか？

○ためないと、自分と違う意見が聞けなくなる。

○ためないと、会話が広がらない。

○ためないと、相手に影響を与えられない。

九段落の「自己ルール」とは？具体的な自己ルールが何か、自分で言える人はいいますか？

○宿題が終わってからでないと、ゲームをしないと決めている。つまり、以前から、するべきことをしないと、やりたいことはしないという自己ルールで生きてきた。

最後に、三段落の会話文に「なぜなら」「だから」を付け加えて、形を理由を言う時の形にしてみました。これなら、いいですか？

○それでは、駄目だと思う。具体的な説明ではない。どこがいい(いやだ)、どういい(いやだ)を言葉で述べないと、駄目。

九年四組【三時間目】

○手引きを使った生徒の数

1	六人	2	八人	3	二人	4	四人	5	一人	6	なし	7	一人
8	一人	9	なし	10.	一人	11.	六人						

九年三組【一時間目】

*教科書を見る順番や、時間について、かなりコントロールした。まず、○ページを見て、というように。

*図を書くタイミングを、初めに持ってきた。原稿用紙に心に浮かんだことを書く前。

*本の見方をかなりコントロールしたので、子どもたちは構えてしまったように感じた。

*図で説明する際に、出てきた具体的な例に対し、どんな項目の言葉を当てはめるか？（例・大きさ／文字／色など）に、結果的にこだわるような説明の仕方をしてしまったため、子どもたちも、まず図をしつかり完成させて項目を分類しなければ、というように意識が向いてしまったように感じた。

*ただ、原稿用紙に書き始めると、手を止めずに集中して書いていた子が多かったように感じた。

*できあがったものは、四組よりも批評に近いものが多かった。

○最初の問い「どちらが好きか？」 東書二十八 光村三

○出てきた項目

- ・絵と内容の合わせ方
- ・絵の位置
- ・文字のサイズ
- ・絵の枚数
- ・構成
- ・色
- ・選択
- ・ふりがな
- ・題名
- ・段落
- ・明るさ
- ・大きさ
- ・絵の枠
- ・読点
- ・色合い
- ・父の絵

九年三組【二時間目】

○四組と同じような流れとなった。

○生徒の実態から、三段落の具体的な会話については、「自分たちにも思い当たることはないか。」という問いかけをしながら、時間をかけて行った。

○最後に、友達の記事（二時間目に書いたもの）を見て、「高められそうな言葉に線を引こう。」という活動の際、「もう、これ以上高められない気がする。」と、どこにも線を引けない子もいた。そのようなときには、一緒に読み、「例えば、ここはもう少し詳しく、具体的に知りたいと思わないかな？」と声をかけた。

九年三組【三時間目】

*本日の六校時に、公開します。

1 今日の活動について知る。

- 絵本の「海のいのち」のお話が、東書にも光村にも載っていることを知る。
- 東書と光村、全く同じ？違う？と考える。

2 板書を参考に違いを見つけていく。

- 実際に二冊の教科書（光村と東書）を見て、どちらが好きか考える。
- なぜ、そちらのほうが好きか、理由を言う。
このとき、教師が、板書して図を仕上げていくので、それを見て自分が注目した視点を確認する。
- 他に、違いはないか、具体的に自分のノートに書き込んでいく。
- 教室の仲間の意見も聞き、一つ一つの気づきが、視点ごとに分けられることを板書の図を見て理解する。

3 図に、「どう感じたか」を書き加えていく。

- ↑違いについては、人と同じところがあるかもしれないが、それについて、どう感じたかは、自分の感じたことである。心に浮かんだことをそのまま書く。

4 図を見ながら、中側（最初に見つけた「違い」）と外側（それについて感じたこと、心に浮かんだこと）を書いていく。（原稿用紙 字数は自由）

1 今日の活動について知る。

- 絵本の「海のいのち」のお話が、東書にも光村にも載っていることを知る。
- 東書と光村、全く同じ？違う？と考える。

2 板書を参考に違いを見つけていく。

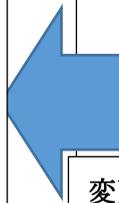
- 実際に二冊の教科書（光村と東書）を見て、どちらが好きか考える。
- なぜ、そちらのほうが好きか、理由を言う。
このとき、教師が、板書して図を仕上げていくので、それを見て自分が注目した視点を確認する。
- 他に、違いはないか、具体的に自分のノートに書き込んでいく。
- 教室の仲間の意見も聞き、一つ一つの気づきが、視点ごとに分けられることを板書の図を見て理解する。

変更後

「どう感じたか」を書き加えていく。

- ↑違いについては、人と同じところがあるかもしれないが、それについて、どう感じたかは、自分の感じたことである。心に浮かんだことをそのまま書く。

4 図を見ながら、中側（最初に見つけた「違い」）と外側（それについて感じたこと、心に浮かんだこと）を書いていく。（原稿用紙 字数は自由）



おわりに 参加してくださった皆様へ

今回は、少しずつではありますが、今までしたことのないことに挑戦しています。皆さんと一緒にって授業を考えてみたいという思いからです。

また、改めて、今回の教材である『批評』の言葉をためる」を子どもたちとともに、立ち止まりながら読んでみますと、様々な発見がありました。大人の私たちにとっても、興味深い文章です。子どもたちから出てきた声に、教室の他の子どもたちが反応して話が広がるということもありました。まだまだ形にはなっていませんが、「批評しながら、自分のことや相手のことを分かっていく」という活動を、またしてみたいなという気もちになりました。

教科書の文章に合わせた活動を、「海のいのち」を使ってなぞってみました。ご覧のように、子どもたちの反応は様々でした。今回の研修会に合わせて準備した、東京書籍と光村図書の教科書ですが、無料でお貸しします。お気軽にお声がけください。よろしくお願ひします。

島根大学教育学部附属義務教育学校後期課程

国語科